様式第5-1号（第7条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	中西　康裕

A Comparison of Japanese Centenarians' and Non-centenarians' Medical Expenditures in the Last Year of Life

（ 和 訳 ）

日本の百寿者及び非百寿者における死亡前 1 年間に発生する医療費の比較

論文内容の要旨

背景

百寿者（100 歳以上の長寿者）が身体障害（disability）を有する割合は非百寿者（100 歳未満）と比較して高くなるものの、百寿者は死亡に至る前の重篤な期間が他の年齢層と比較してより短い傾向にあることが先行研究により指摘されている。しかし、百寿者の重症期間を評価した研究は少なく、死亡前医療費に焦点を当てた研究事例はほとんどない。本研究では、大規模レセプトデータを用いて、医療費を医療資源の投入量と見立てることにより、百寿者と非百寿者の死亡前 1 年間に発生する医療費を比較・分析する。

方法

奈良県 KDB 様データにおける 2013 年 4 月～2018 年 3 月まで（5 年間）の医療・介護レセプトデータを用いた。2014 年 4 月～2018 年 3 月の 4 年間に死亡した 75～109 歳の後期高齢者医療制度加入者を対象に、入院患者数、入院外患者数、入院医療費、入院外医療費、疑い病名を除く病名、要支援・要介護度をそれぞれ抽出した。死亡日から遡り 1 年間に発生した入院及び入院外医療費、さらに入院患者割合を算出し、性別、5 歳年齢階級別で比較した（1 年間及び 30 日ごとで算出）。医療費の算出にあたっては、交絡因子の調整なし（unadjusted）の中央値と、一般化推定方程式（GEE）を用いて病名及び要支援・要介護度で調整した（adjusted）中央値をそれぞれ算出した。

結果

抽出した死亡者数は、男女合計で 34,317 名であった。100-104 歳の年齢階級では 872 名、105-109 歳では 78 名が抽出された。死亡前 1 年間に発生する総医療費は、年齢階級が上がるほど有意に低下する傾向にあった。GEE による調整後の死亡前医療費の傾向は調整前とほとんど同様であった。また、入院患者割合においても年齢階級が上がるほど割合は低下し、105-109 歳で最も低くなった。医療費及び入院患者割合ともに、性別による傾向の違いはほとんど見られなかった。

結論

大規模レセプトデータを用いて死亡前医療費の分析を行った結果、百寿者の死亡前 1 年間に発生する医療費は、非百寿者と比較して低い傾向にあることが明らかとなった。百寿者の医学的特徴は、保険診療の利用実態において年齢階級の上昇に伴い死亡前医療費及び入院患者割合が低下するという現象によって観察される可能性がある。